

一食平和運動の歩み③

おやさと研究所准教授
野口 茂 Shigeru Noguchi

「ゆめポッケ」運動とは

世界には戦争や紛争がまだある。子供たちはその小さな目で、たくさんの悲しい出来事をみてきた。争いが終わったところでも、子供たちの心の傷は消えることはない。私達にできることはないのだろうか――。

そんなメッセージとともに海外の紛争地や難民キャンプの映像がスクリーンに映し出されると、それまではしゃいでいた子供たちの顔から笑いが消え、真剣な眼差しにかわった。立正佼成会のある教会で行われた平和活動「ゆめポッケ」での一場面だ。その活動の仕上げとも言えるポシェットの箱詰め作業を手伝おうと、当日は朝から約50名の子供たちと多くの保護者が集まっていた。

「ゆめポッケ」運動とは、主に紛争や災害といった問題の犠牲となり傷ついた子供たちを勇気づけようと、立正佼成会の小・中学生が中心となって文房具や玩具、手作りのカードを手作りのポシェットに詰めてプレゼントしようとする平和活動である。前稿で紹介した「一食を捧げる運動」の、小中学生版と位置付けることができる。

活動の発端は1994年、旧ユーゴスラビア紛争の支援プロジェクトにまでさかのぼる。佼成会が日本緊急救援NGOグループJENに加盟していた立場から、他のNGOとも協力して現地の子どもたちへ緊急に必要な文房具などの日用品を送る「愛のポシェット運動」に参画したことがきっかけとなった。運動に取り組んだ4年の間に、現地のニーズも緊急援助から自助自立のための支援へと移行していった。しかし、子どもたちが苦しい生活を強いられていることに変わりはない。そこで1999年、「モノ」だけではなく“まごころ”を届ける」とともに、「世界平和に向けて行動できる青少年の育成」や「実際に苦しんでいる彼らと同年代の子どもの祈りを届けたい」との願いから、この運動が「ゆめポッケ」として改めてスタートしたのだ。

平和への祈りと他者を思いやる心

全国の教会や支部では、毎年5月から6月にかけて事前学習会を開催。ポッケの作り方から、現地で特に喜ばれるものは何か、また逆に戦争や特定の宗教を連想させる玩具類は避けることなどの諸注意がなされる。だがより大切なことは、この活動の趣旨を子供たちはもちろん、特に若い保護者の方々にも理解してもらうことだと担当スタッフは語る。ポッケ作りを通して家庭で平和の尊さを語り合い、自他のいのちを尊び、そして他者を思いやる心を育むことが求められている。しかし、「いまの時代、親が我慢できなくなっているように思います。おもちゃ一つ、ノート一冊を子供に買い与えることは、そう難しいことではないですから。でも日々のくらしに感謝して、自分のものを



を分け与える、人に使っていただく。そうした心を親が持てなければ、子供にもこの活動の趣旨を伝えることはできないでしょう。」
こうして各家庭で手作りされたポシェット

が教会へ運ばれ、夏休みの一日を利用して、大勢の参加者とともに中身の最終確認や箱詰め作業が行われることになる。海外へ船便で輸送されるため、全国の教会ではすべて規定の段ボール箱に6個のポシェットが収められる。私が見学した教会では、半日の作業で90箱以上を完成させた。子供たちの歓声がこだまする会場で、作業に共に汗を流していたある婦人会員の方は、こう感想を述べてくれた。「幼稚園に通う子供は、なぜ私のおもちゃを人にあげないといけなくて泣き叫んだこともあった。しかし5、6年活動を続けてきた小学生の子供は、今年は『これを送ったら喜んでくれるかな』と、自らが考えて行動してくれるようになった。この活動が身近な生活のなかでも、『学校で休んでいる友達はどうしているだろう』といった言葉や思いやりの心へとつながってきているのだと思う。」

平和貢献活動の位置づけ

だが、尊い平和への祈りがこもったポシェットを、実際に海外の紛争地や被災地にいる子供たちへ送り届ける作業は、並大抵なことではない。これまで支援してきた国は旧ユーゴスラビアを皮切りに、レバノン、北アイルランド、パレスチナ、イスラエル、アフガニスタン等。これら国名をみただけでその困難さが伝わってくるようだ。近年ではフィリピン、スリランカ、アゼルバイジャンへと支援先は拡大。2010年度は、全国から寄せられた3万3,701個のポッケが、厳しい状況下で暮らす子供たちへ届けられる。こうした活動は、当然のことながらスタッフによる周到な事前調査や、立正佼成会本部がもつ国内外のネットワークがあつてこそ成り立つものなのであろう。

特筆すべき点は、この「ゆめポッケ」などの平和貢献活動は、佼成会では「国際伝道部」ではなく「社会貢献グループ」という別部署が担当していることである。このことは、救済活動や社会福祉活動と、伝道や改宗のための活動とは一線を画すという基本姿勢を明確に表すものであろう。原則として、海外での支援活動には、現地にある立正佼成会の教会も携わっていない。

一食運動の担当スタッフは、「私個人の意見としては、布教を目的とした援助は間違っていないと思う。それは布教こそが人に真の救いをもたらすというその方の、純真な信仰心の現れだろうから」と前置きした上で、次のように言葉を続けた。「しかし、先ず大切にされるべきは相手のニーズであり、その意思が尊重されなくてはならない。救援活動というものは誤解を招く要素が多く含まれているということも十分に認識しておく必要がある。せつかく素晴らしい活動をしていながら、現地の人々や国内の関係者にも誤解を招いたことが、宗教者による人道支援の活動でこれまでに起きている。善か悪かではなく、慎重に、かつ丁寧に活動を進めていくことが大切だろう。」

一宗教者としては、誰もが世界の平和を願う心は持ち合わせているはずだ。だが、その思いを実際の活動として、しかも海外の地で限られた予算（浄財）と人員を使って具現化していくためには、援助活動を教理からどのように捉え、布教活動との関係をどう位置付けていくのか。さまざまな立場からの意見を開陳させて十分に議論を深めておく、その慎重さと丁寧さが求められている。